



新かきやま	夢の花	馬夢の心	夢の種	狗夢の花	養老の心	車前子	苗香の實	多き花	からす瓜	玉つさ	通	茅	菟	枝	つらゆし	姜の花	種ふくべ	種ふくび	大根	菜	終る	かぶし	時	けい	時	相六	前	小	菜	かぶ	菜
-------	-----	------	-----	------	------	-----	------	-----	------	-----	---	---	---	---	------	-----	------	------	----	---	----	-----	---	----	---	----	---	---	---	----	---

俳諧歳時記新采草 卷之二

京都 山口素楊編輯

四月の 席杖競 〔菱糰輪 黄布祿の所神 事六四月廿日白か茂の氏人 野馬く諸つ帰る時市野野連理の芝くくつらくく席杖を 幸とてそく丈小多小を編中例のくくく其真あり

稻荷祭 卯日官幣大社稻荷神社の祭ニ 神樂五基各氏地を渡所 伊勢

神衣祭 十四日 〔三井根 神衣祭を神祇会にせり 神祇部密齋して三河の赤引の神調のま

岩梨 を以神衣をわく又麻績建云氏人麻をうく 和ぬ荒ぬを織て神時を神衣祭にり

四季三書

八月 植物 四月 五十七



つはみ菜 間引菜  
 中の子 六根 粟 苧  
 肥 苧 稗 苧  
 蜀 黍 玉蜀黍 苧  
 葺 苧 持



つら草 扱かけ  
 ちん草 扱かけ  
 岩かけ 草  
 いん草 扱かけ  
 田 苧 中 苧  
 八束 苧 稲むらへ  
 稲 出之 稲 于  
 稲 恒 稲 塚  
 稲 舟 稲 かけ  
 秋の田 新見 田を守 小田守

如漢二七圖會 莞花... 覆盆子  
 三五月花... 蘭花

紫羅傘 尾... 蘭花

石薺花 或ハ石薺... 鼻高祭

梅天 杜甫詩... 鼻高祭

葉柳 生ハ即チ... 鼻高祭

葉檜 也ハ呂... 鼻高祭

花抽 大和本草... 鼻高祭

白丁花 和漢三... 鼻高祭

蓮の密 本草... 鼻高祭

飛蟻 本草... 鼻高祭

八月桂... 四月は... 五十八







十名可也

何 産

麩

けしき

江

麩

くさくさ

崩 薬

於 穴 へ 入

衣 食 類

搏

衣 礎

衣 打

去る 振うら

新

縮 新

采

あとし 采

醪 醪 酒

毛 乃 乃 新

酒

中 汲 古 酒

饗

い 草 漬

如 麦

古くは倍倍の加減あり二名を友に用ひたるを初とす  
花のふさ敷とぞ ● 木苜蓿、牡丹の異名ニ賈耽花譜天

室中禁中初て木苜蓿を重んず四本を以て紅紫浅紅  
通白興慶池の東此香亭に植ゆと云 ● 牡丹、牡丹

を云百氏文集牡丹芳、花開落花二十日一城之人皆知狂  
● 花王、歐陽脩花秋名、魏曹公嘗云曰人牡丹を謂て花王と

今、魏黄真、五王にて魏世の乃、五后ニ ● 名取州、牡  
丹の二名ニ藤の草、昔のよ、まの花を以て愛て多く植ゆ

昼は保自多の夜はもすから風を損ふを云す  
たのこりて、男他の人ありと云離別一と云、やま

す、ささく元のおくす、りおん、仍く、り ● 藏王、於  
人のん、あし、わ、ま、子、花、を、ま、さ、い、か、ま、す、く、り

● 夜百草、関元遺事、明皇沈香亭の前、牡丹二枝、二次朝、  
深窓、黄、夜、粉、白、にて、異、名、古、異、二、帝、曰、と、花

木の妖ニ、揚国忠、山、百宝を以て探と、一、天津、人、今  
や、く、り、て、後、む、ん、ろ、り、子、花、さ、く、り、り、関、院、在、天、臣

● 富貴草、云々、草、牡丹の異名ニ又山福、  
● 豊福、此二名を牡丹の、と、云、説、ハ、非、あり

● 寄鐸、ホウ、シヤ、ク、  
● 花、本草、鬼白の一種あり、葉敷層を、あ、花、鹿、麻、似、て  
面、青、く、背、紫、く、て、細、毛、あり、葉、下、莖、を、付、く、一、花

神 秋

彼 岸 三 村 祭

堺 天 神 祭

敦 賀 祭

つ け ぎ ぎ ぎ ぎ

け ぎ ぎ ぎ ぎ

け ぎ ぎ ぎ ぎ

け ぎ ぎ ぎ ぎ

け ぎ ぎ ぎ ぎ

け ぎ ぎ ぎ ぎ

け ぎ ぎ ぎ ぎ

け ぎ ぎ ぎ ぎ



け ぎ ぎ ぎ ぎ 杜 鵑 ● 杜、字、子、規、野、鵲、郭、を、嚙、ま、る、ふ、の、得、  
ら、揺、く、さ、い、和、漢、三、才、圖、會、杜、鵑、の、形、雀、鵲、に、似、  
て、毛、皮、尾、尾、故、白、し、唇、の、紅、を、  
翅、も、白、き、斑、あり、口、中、赤、く、頭、小、冠、毛、あり、經、掌、蒼、色、  
毛、前、の、指、二、ツ、連、枝、後、の、趾、二、ツ、並、を、異、二、季、葉、鳴、也、  
け、ん、か、け、の、と、さ、か、か、し、夏、を、く、最、一、初、秋、を、く、  
や、む、を、月、を、源、山、蟄、を、云、杜、鵑、の、二、名、和、漢、と、  
さ、く、さ、い、● 杜、字、子、規、野、鵲、郭、を、嚙、ま、る、ふ、の、得、  
る、を、勸、農、を、さ、古、頭、か、の、部、を、く、位、も、○ 杜、鵑、  
さ、の、象、中、く、生、首、を、く、大、く、あ、り、万、葉、杜、鵑、之、  
生、聊、乃、中、尔、懼、公、鳥、独、所、生、而、已、父、尔、似、而、者、不、鳴、已、母、  
尔、似、而、者、不、鳴、下、四、續、世、雜、物、傳、と、此、の、マ、ク、と、  
類、改、哥、う、ま、の、と、の、あり、り、る、を、以、つ、ま、の、音、  
あ、く、ま、く、ま、く、ん、く、ま、く、ま、く、ま、く、ま、く、ま、く、ま、く、  
あ、く、ま、く、ま、く、ま、く、ま、く、ま、く、ま、く、ま、く、ま、く、  
あ、く、ま、く、ま、く、ま、く、ま、く、ま、く、ま、く、ま、く、ま、く、

兼 三 夏 物 子 子 ● 和、漢、三、才、圖、會、俗、云、楸、云、み、か、し、  
溝、泥、の、中、温、熱、相、感、一、て、小、麦



菅大臣祭 御靈祭

素名祭 菩薩祭

宰府祭 西院祭

公事故友

駒 曳駒 迎

聖月の節 音原の節 上野の節 引まけの節

秋 眞司 百

秋 社

秋 社

九月之部

乾 坤 陽 重 九

生む長き二三分所... 蛭 月

廣草化爲蛭... 蛭大抵大さ三四分思を以て

● 寔の蛭... 昔の車胤家貧くして書油を得

おのり... 後世の俗言ありしに

● 土塔會... 按て東成郡四天王寺南大門の下土塔塚の

● 常盤木の落葉... 今治の常盤寺に

● 時鳥... 秋とて愛する松の外の木を云く

杜松を云く... 経房卿家哥合

● 通鴨... 大和木草日光山中

● 蕪二夏物... 小一思を二種あり

● 地主祭... 漢富記文安四年四月九日庚午

● 菅の莖... 田圃意圖

● 茶枕草... 和漢三才圖會

● 苗葉... 九月乾坤植物

● 九月乾坤植物... 四月

● 九月乾坤植物... 十一月

● 九月乾坤植物... 十一月

● 九月乾坤植物... 十一月

● 九月乾坤植物... 十一月

● 九月乾坤植物... 十一月

● 九月乾坤植物... 十一月

菊の節句	まぐくの目
後の雛	むぐの雛
十三夜	後の名月
後の月	月の名ふ
秋の色	山粧ふ
秋時雨	秋暮
霜暮	秋
秋ふき	行秋
秋の後	秋の名
秋の限	秋の別
冬待	冬近き
九月	秋
植物類	

杜松を云く... 経房卿家哥合  
 蕪二夏物... 小一思を二種あり... 菅の莖... 田圃意圖... 茶枕草... 苗葉... 九月乾坤植物... 四月... 十一月...



菊のほろろ 夕の菊 夕の菊

残 葉 十日菊 後日菊

葉 菊 菊 菊

白 菊 菊 菊

花のよみ 菊 菊

草 牡丹 仙 蓼

我 木 香 於木の實

佛 甲 草 小 蓮 花

菊 菊 花 芦の穂

尾 花 散 杏子紅葉

鴨 上 戸 杏子紅葉

依るを 大神祭 神社啓蒙 大神社、大和國 城上郡、在る所一座大

已貴命大神と大輪の神、大物主神の御事、三輪山、

中、本縁ハ、此大物主神活、五依、斯と云、女の、こゝろ、思ひ

は、かゝる、あ、な、り、と、ま、り、人、さ、ら、に、あ、ら、う、ま、り、その、女、は、

妊、ま、り、て、父、母、ま、り、い、ち、や、い、ち、女、あ、ら、う、ま、り、神、人、の、末

子、ま、り、た、ま、り、あ、ら、う、ま、り、い、ち、い、ち、針、を、た、り、衣、の、緒、を、

三輪山、三輪山、三輪山、

比、小禪師、右四座、同社、の、ま、り、故、西、宮、と、云、又、社、説、云、

新、五、座、中、の、考、火、々、出、見、尊、を、以、て、本、社、と、云、此、如、も

日吉祭之 老鶯 十論、為、禱、抄、歌、考、の、ま、り、此、如、も、

物、ま、り、ま、り、此、如、も、白、氏、文、集、を、ま、り、老、鶯、ま、り、病、を

を、ま、り、ま、り、此、如、も、白、氏、文、集、を、ま、り、老、鶯、ま、り、病、を

を、ま、り、ま、り、此、如、も、白、氏、文、集、を、ま、り、老、鶯、ま、り、病、を

を、ま、り、ま、り、此、如、も、白、氏、文、集、を、ま、り、老、鶯、ま、り、病、を

を、ま、り、ま、り、此、如、も、白、氏、文、集、を、ま、り、老、鶯、ま、り、病、を

を、ま、り、ま、り、此、如、も、白、氏、文、集、を、ま、り、老、鶯、ま、り、病、を

を、ま、り、ま、り、此、如、も、白、氏、文、集、を、ま、り、老、鶯、ま、り、病、を

を、ま、り、ま、り、此、如、も、白、氏、文、集、を、ま、り、老、鶯、ま、り、病、を

を、ま、り、ま、り、此、如、も、白、氏、文、集、を、ま、り、老、鶯、ま、り、病、を

を、ま、り、ま、り、此、如、も、白、氏、文、集、を、ま、り、老、鶯、ま、り、病、を

を、ま、り、ま、り、此、如、も、白、氏、文、集、を、ま、り、老、鶯、ま、り、病、を

を、ま、り、ま、り、此、如、も、白、氏、文、集、を、ま、り、老、鶯、ま、り、病、を

を、ま、り、ま、り、此、如、も、白、氏、文、集、を、ま、り、老、鶯、ま、り、病、を

を、ま、り、ま、り、此、如、も、白、氏、文、集、を、ま、り、老、鶯、ま、り、病、を

を、ま、り、ま、り、此、如、も、白、氏、文、集、を、ま、り、老、鶯、ま、り、病、を

柿 もももも 柞 もももも

すゆもももも 楓 紅葉

楢 紅葉 むももももも

下もももも 色見草

紅葉もももも 色見草

紅葉もももも 色見草

水のもももも 芭蕉破る

うらもももも 野山の色

野山の色 野山の色

枯野の色 枯野の色

草もももも 草もももも

草もももも 草もももも

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

大神祭

和清天

和清天

和清天

和清天

和清天

若葉の花

若葉の花

若葉の花

若葉の花

若葉の花











ふくろ	何くめ	新 蕎麦	新 柿	九日小袖	新 綿	神 萩	那の宮別	桂宮相撲	鞠馬祭	生玉祭	太秦祭
何くめ	何くめ	青豆	柿干	菊			山口祭	生取祭	西香言祭	醍醐祭	牛はらり

牛祭之圖



自文字の  
牛はらり  
奉り  
奉り

四季 牛祭 寺 乙 行 三

紫白言似くたるを... 肥大... 赤... 白... 花... 風車の花... かんまろ... 三才園... 萩... 後声あり... 白肉を飯食ふ... 大和木草... 長久余上... 世比より... 蟹... 蚊... 九月神歌... 四月... 六十五

若草... 一名... 味... 白肉... 大和木草... 長久余上... 世比より... 蟹... 蚊... 九月神歌... 四月... 六十五











草 中 併

植物類

藤 紫 木の紫

木の子 木の紫 木の紫

桑 茶の花

山茶花 復花

松風の時雨 室 咲

むろの栞 枯 柳

枇杷の花 八ツ子の花

柃の花 榎の花

冬牡丹 草かき

枯尾花 咲

菊 咲

萩かき 葛かき

枯 芦 由きの下

石蓮の花 麦 苺

蕎麦 苺

大根引 冬木立

水 仙 菊

冬きく 枯 野

えびら 葱

福ふか 畑 蕨引

水 菜

四季 芥 芥 芥 芥

鐵茶所の神を以て地を祠るに蓋は神の福食を以て  
依りて里女婚を以てさし祭礼に必蓋を戴て神

中世業平の花を以て  
里婦笑顔を蓄く教を重く落座の故に園を

王孫花 名匠別録 王孫は海西川  
谷石の汝南の城廓の垣

津波須 兼三夏物 津波須

練供養 兼三夏物 練供養

夏木立 兼三夏物 夏木立

生節 兼三夏物 生節

夏羽織 兼三夏物 夏羽織

根干 兼三夏物 根干

山祭 兼三夏物 山祭

夏月 兼三夏物 夏月

夏月 兼三夏物 夏月

夏月 兼三夏物 夏月

夏月 兼三夏物 夏月

夏月 兼三夏物 夏月

夏月 兼三夏物 夏月

夏月 兼三夏物 夏月

夏月 兼三夏物 夏月

夏月 兼三夏物 夏月

夏月 兼三夏物 夏月

夏月 兼三夏物 夏月



部類 伊勢 齋 時 新 類 考

生類

鶯の子 水魚

鶯 鶯 鶯

杜 蠣 河豚

杜 蠣 水生 魚

浮 存 鴨 鷹

鴨 鴨 鴨

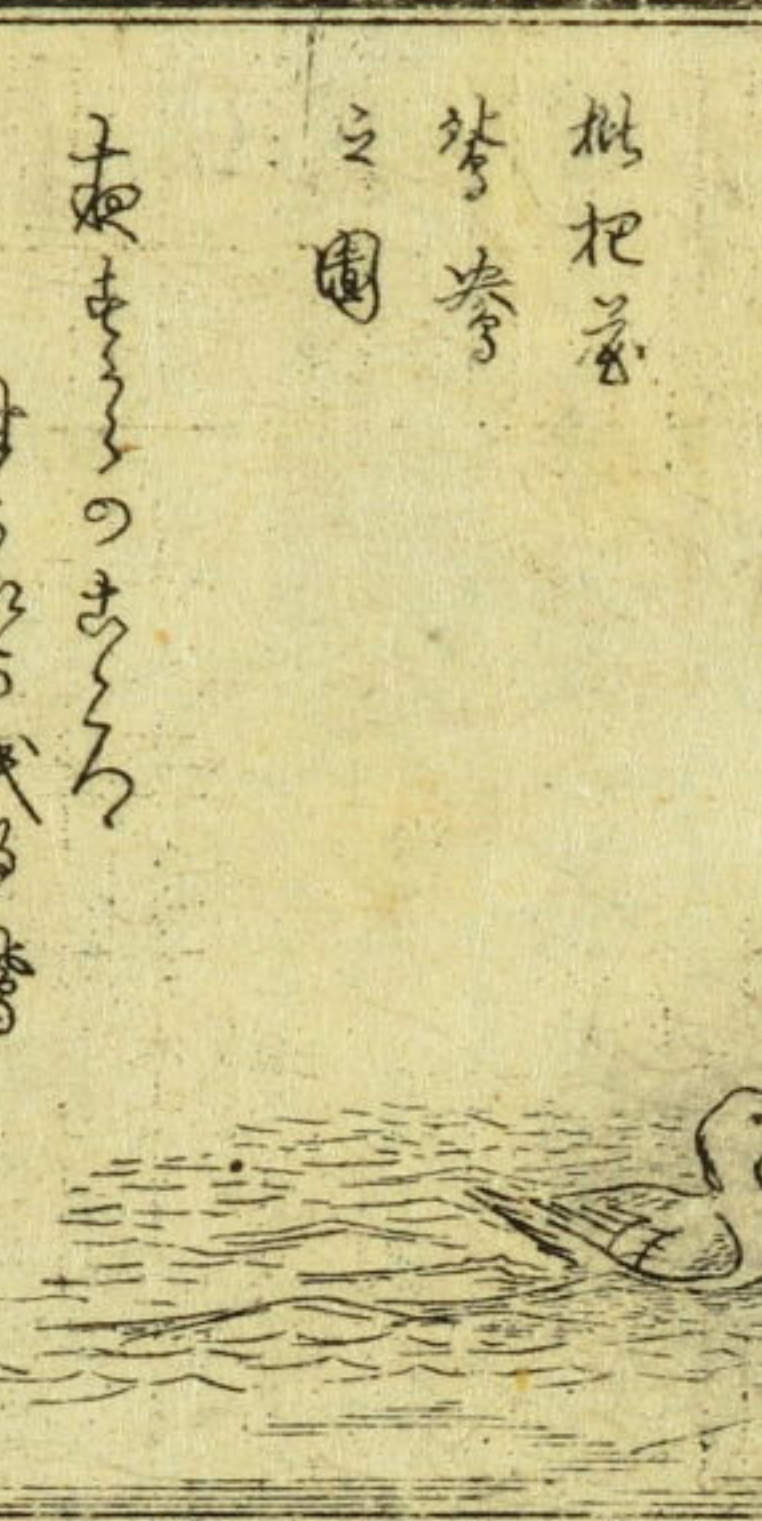
鴨 鴨 鴨

況 免 あきむら

川 干鳥

川 干鳥

鶯 鶯



四季 廿 皆 歳 寺 巳 斤 天 金

夏の霜 國語月照平 夜霜をさの詩

夏の雨 五月雨も夕暮 雨の音を聞くは

夏の野 百草の茂るを自るを

夏山 郭瀬書譜 夏山 蒼翠如滴

向日明神祭 神社啓蒙 向日の神 社ハ山城國ハ訓郡

結葉 金葉集 二徳元年四 月三条内裏にて庭樹

麦秋 礼月令 孟夏 月麦秋至 註

麦苗 同 上 小麦穂厚く硬く 小児用て苗を作る

梅宮祭 上申日 神社啓蒙 梅の宮ハ山城國若 野郡ニ在玉城をさす

十月廿 亥 衣 食 四月 廿 九

結葉 秋の百穀成熟の期ニ此の時を秋と云ふ

麦秋 秋の百穀成熟の期ニ此の時を秋と云ふ

麦苗 秋の百穀成熟の期ニ此の時を秋と云ふ

梅宮祭 秋の百穀成熟の期ニ此の時を秋と云ふ

十月廿 亥 衣 食 四月 廿 九

十月廿 亥 衣 食 四月 廿 九

十月廿 亥 衣 食 四月 廿 九

十月廿 亥 衣 食 四月 廿 九

十月廿 亥 衣 食 四月 廿 九

十月廿 亥 衣 食 四月 廿 九

十月廿 亥 衣 食 四月 廿 九

十月廿 亥 衣 食 四月 廿 九



木 兔 夜 鳥 引

柴 債 竹 筍

綱代守 木

あどろろ人

衣食類

衣の子餅 茶の口切

口切茶會之圖



干菜 干大根 干菜

干菜 干菜 干菜

干菜 干菜 干菜

干菜 干菜 干菜

干菜 干菜 干菜

干菜 干菜 干菜

干菜 干菜 干菜

干菜 干菜 干菜

干菜 干菜 干菜

干菜 干菜 干菜

干菜 干菜 干菜

干菜 干菜 干菜

干菜 干菜 干菜

干菜 干菜 干菜

干菜 干菜 干菜

式江次第... 橋氏の祖廟... 世俗妊娠の婦女... 道

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根

卵の花 [和漢三才圖會] 揚子江... 山空木... 根











鷹之圖



鷹衣の袖

鷹の鷹

鷹の鷹

鷹衣の袖... 鷹の鷹... 鷹の鷹...

狩場の鷹

鷹の鷹

鷹の鷹

鷹の鷹

鷹の鷹

鷹の鷹

鷹の鷹

鷹の鷹

鷹の鷹

鷹の鷹

鷹の鷹

鷹の鷹

鷹の鷹

鷹の鷹

中心白く... 鷹の鷹... 鷹の鷹...

鷹の鷹... 鷹の鷹... 鷹の鷹...

鷹の鷹... 鷹の鷹... 鷹の鷹...

鷹の鷹... 鷹の鷹... 鷹の鷹...

鷹の鷹... 鷹の鷹... 鷹の鷹...

鷹の鷹... 鷹の鷹... 鷹の鷹...

鷹の鷹... 鷹の鷹... 鷹の鷹...

鷹の鷹... 鷹の鷹... 鷹の鷹...

鷹の鷹... 鷹の鷹... 鷹の鷹...

鷹の鷹... 鷹の鷹... 鷹の鷹...

鷹の鷹... 鷹の鷹... 鷹の鷹...

衣食神叙

四月まけ 七十三

鷹の鷹... 鷹の鷹... 鷹の鷹...

鷹の鷹... 鷹の鷹... 鷹の鷹...

鷹の鷹... 鷹の鷹... 鷹の鷹...

鷹の鷹... 鷹の鷹... 鷹の鷹...











部類 伊弉諾時新御事

箕和田鯉取 冬鯉取

やつ免鱧 鵜巢をえ

衣食類

乙子の餅 藥 喰

鯛味噌 氷 齋

寒造り酒 豆 麩 氷

あんにんく氷

神 衆

寒垢離 寒念佛

脚國忌 菰 入

菰入粥 温糟粥

最勝寺灌頂 佛 名

大徳寺冥山忌 芥宮繪馬

めくらの神事

和布刈之圖

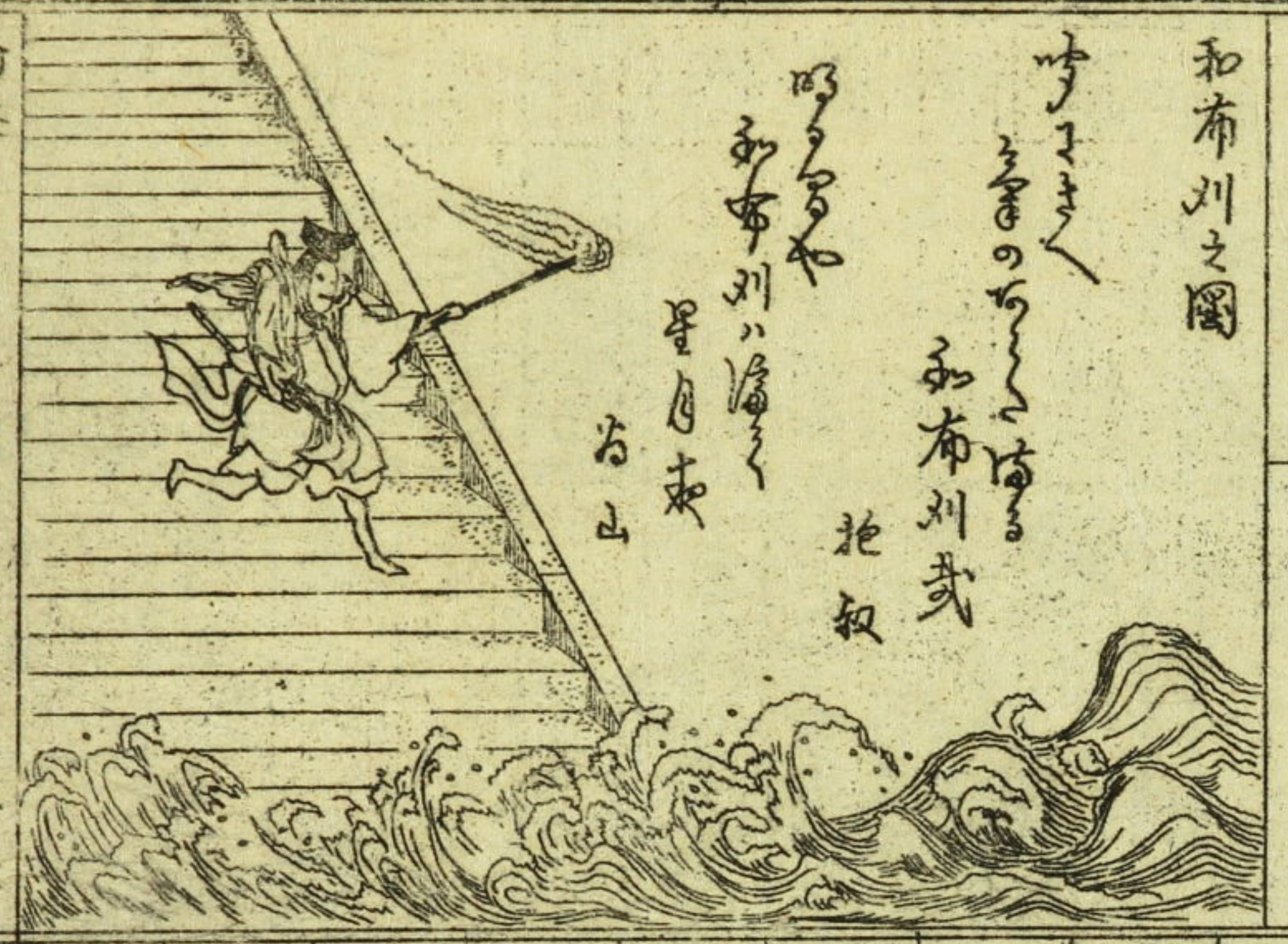
すまき

和布刈式

和布刈の儀

和布刈

お山



壁代より撤去所置ありとも新しきを敷せり所暖の  
押直衣所より一のちの所ひと所張袴内藏寮より

奉る 氷を供 延喜式主水式三十九脚氷を供す  
三月一日迄すく九月二十日に

書云同書云氷を貢く處より徳島郡徳園の氷  
室岡菅原郡小野の氷室栗栖母の氷室探木原の氷

室土阪の氷室石前川の氷室大和國山辺郡新井の氷室  
河内國深井郡設良の氷室近江國志賀郡那花の

氷室丹波國玉葉郡那池田 江州八幡祭 中  
のめまはす所あり

神社祭法華寺奉八幡宮の儀也國志賀郡那花の  
長徳二年放生會行 寺説慶長年中関白秀次

公此法花々奉城廓を構ふるに池上の宮を福  
下の宮と合せり移さるに後徳川家の陣あり

を修す金堂を學侶の者も修すを修すを修すを  
高野花供 二十日徳川  
五基越知川を修す

木下閣 茂林にて晴きを云  
萬葉集木の下にあり

鯉 和名抄鯉 神伊師布之

慈鳥 杜若の 吳名ニ

て 年 拾遺律勢の所より奉りてみ子のあきなり

安天神祭 午日 江州野海郡江辺の庄あり  
永多村少村と村の氏神ニ

鎮座年月洋あり以明和年中より七百余年  
ありと云久延入五十年十一月十日自近原前守雅行

再建也○平清盛の妻妓五世地へ出せり故に平家乃  
奉行判物大繪圖氏子と云村の傳説あり又北郡

季吟出生の地あり例祭四月十日より十三日まで連  
舟十舟真行ちと養を頭ハ地頭のを定例と云云

繡球花 和漢三才圖會繡園の木云云五七尺  
葉ハ指根うつ木に似て白く咲く

月花云々初ハ淡青色也後正白なりゆき花あり  
四月十三日一輪小輪園と云ある木云云四月八日

十二月公事繁華 歳暮 四月 七十六



公事故実

かづけ 漆 漆 盤 上

荷 花 使 進 進 盤

歳暮之詞

師 走 車 け 一 免

節 季 以 一 免

煉 掃 餅 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

種く長しし掃棠の製み似く花  
よく白く大さく半さくをさく  
あ 裕 凡四

日を更衣とき世自ら裕を用ひ  
糖本よりして布衫を用ふ  
青 簾 青葉

一説云山のまじりてあるをいふ  
雨 蛙 枝蛙

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

大和本草 土鴨 雨蛙をいふ  
青 雀 青雀、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

公事故実

かづけ 漆 漆 盤 上

荷 花 使 進 進 盤

歳暮之詞

師 走 車 け 一 免

節 季 以 一 免

煉 掃 餅 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

餅 拾 拾 餅 花

種く長しし掃棠の製み似く花  
よく白く大さく半さくをさく  
あ 裕 凡四

日を更衣とき世自ら裕を用ひ  
糖本よりして布衫を用ふ  
青 簾 青葉

一説云山のまじりてあるをいふ  
雨 蛙 枝蛙

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

大和本草 土鴨 雨蛙をいふ  
青 雀 青雀、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

蜀葵をいふ四月花をいふ木槿をいふ  
蜀 葵 蜀葵、木二

四季 竹 竹 竹 竹

四季 竹 竹 竹 竹

十二月 歳暮 四月 廿七

十二月 歳暮 四月 廿七



部類 自註 時記 新編

大原ざね 吉田大抜

内待所神乐 五條天神治

あつらひ 古 曆

巻のつる香 右の巻曆

曆の末 札 納

麦 待 喜 近 幸

春 隣 星 佛 賣

年 籠 年の末

行 年 年の末

年の終 年の尾

惜む 年 中 満

何をよめよの市へ行高 芭蕉  
子をもよひいり川成入にまき 甘角  
餅揚や犬の見上り 柿の先 許 古  
以孫くく人いさるん 年 路 通  
我まきくくぬいあやまの香 尚 白  
夫婦してふきぬ戸あり 浮井 乙 由



何をよめよの市へ行高 芭蕉  
子をもよひいり川成入にまき 甘角  
餅揚や犬の見上り 柿の先 許 古  
以孫くく人いさるん 年 路 通  
我まきくくぬいあやまの香 尚 白  
夫婦してふきぬ戸あり 浮井 乙 由

四季 廿三歳暮 四月十五

翔るそと 夏月と色を漬す 荻山椒 草之秦椒蜀椒

の二種あり 葉の刺あり 葉硬くして 濁あり 四月末を結

ふ花をく 但枝の間を生かす 葉の刺を結 葉の刺を結

をを青 藜 時珍曰 灰藜 四月苗を生かす 藜の刺を結

大あま老く 葉の刺を結 葉の刺を結 葉の刺を結

たの宿もく 葉の刺を結 葉の刺を結 葉の刺を結

近の園日 枝神社の滋賀郡坂本 有登神社 大日尊ニ申

の日に ぬ東坂本の山王祭 年の刺通く 田楽法師 妙子舞

比敷の 人並 衆徒 前敷 して 神楽を 運へ 七社の神楽

山を 下り 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を

山門の 宿徒 杖敷 杖敷 杖敷 杖敷 杖敷 杖敷 杖敷 杖敷

後杖敷 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

京の山王町 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

又江の 藤舟の 他人 舟供を 献す 祭の日 藤舟 二被り上

に 浮舟の 舟供を 奏して 舟の 舟供を 献す 舟を 舟供

舟を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を

被る 藤舟の 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を

祭の 藤舟の 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を

舟の 藤舟の 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を

舟の 藤舟の 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を

舟の 藤舟の 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を

舟の 藤舟の 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を

舟の 藤舟の 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を

舟の 藤舟の 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を 舟供を

十二月 歳暮 四月 十五 七十八



かゝ偶々古佛立多り年の市 時 夢  
ふる布や終りきり鬼も末々 宗 文  
種々々々々々々々々々々々々々 士 仍  
餅をわらわらとやうて盆の上 梅 後  
もろろ梅の孝父々々々々行燈 茅 山  
著く行年や賢の荒まき々々 寺 地  
庵も多し 福三味もあるや々 芝 茂

年の序	年の終	年の限	年の仕
年の初	年の終	年の限	年の仕
大三十日	掛	小吟	日
かけを	善の	除	末
大	年	年	年

忌日拾遺

義仲忌	正月 二十日	近江粟津義仲寺
兼好忌	二月 十日	西行忌
千利休忌	二月 廿日	蓮如上人忌
宗因忌	三月 廿日	蟬之忌
石川丈山忌	同上	京詩仙堂墓
頼政忌	五月 廿日	山城宇治平等院遺跡アリ
業平忌	五月 廿日	季吟忌
宗祇忌	七月 十日	定家忌
夢忘忌	九月 二十日	芭蕉翁忌
時雨會	十月 十日	永観忌
枯野會	十月 廿日	
伊勢忌	十月 廿日	

四季 伊勢 時 新 書

色相白く故く白桐と名く○格相一名青如狼狸○宗爽  
曰格相四月御葉之花を完く車花の如く○大和本草 括  
桐又青相とく古人の行状を存せしは是二世白相多  
く格相と名く○和名抄 格相は三月花之琴瑟之作と云  
る○  
**金柑の花** 木橘の如くして小く五分五七又葉  
橙の如く刺多し初夏白花を咲く  
**羊** キン

**蹄花** 羊蹄根。時珍曰羊蹄ハ葉の長さ尺餘牛乃  
舌の形を似たり夏に入ると莖を起し  
花を多し実を結ひ夏至即ち枯る羊蹄ハ根を  
以て多しと云○和訓義解 俗名ハ根又まじりて夏  
に至ると小葉花々々々根大黃に似たり和倍大黃  
と云者是ニ莖花も似たり赤の二種ありて其実枝た  
らつ振ら動くをハ **割葦鳥** 葦原雀。葦  
を音に似たりと云

**布** 曝賣。紀年夏日本長瀑布ハ講布木布の類  
曝賣するを生布と云  
**油鴨足草** 本草綱目  
本草ハ生布と云し  
耳草、陰濕の處に生る人亦石の上を載ると五六寸  
細き毛あり一莖一葉荷蓋の状なり葉の大きさを  
夏少花完く  
**兼二夏物 內衣** 和名抄 浴室云  
うまぬ毛

七ツを内衣と云和名由和多地良、論語註、明衣ハ布を  
以て沐浴の衣と云○今の夏月浴衣と云所の木布を  
以て内衣と云と云ゆ  
**冥途の鳥** 杜  
仲ハ冥途の鳥と云

の吳名ハ **十王經** 閻魔の卒三魂を縛めて關の楯下と云る  
二の鳥棲亭一を無常鳥と名つ二を抜目をと名  
づく我故が舊里に化して野鶴鳥と云る怪怪を示  
し○和名抄 野鶴 舊里に化して鳥鳥と  
云る怪怪を示して阿和薩迦

**水屋能** 和名抄 野鶴 舊里に化して鳥鳥と  
云る怪怪を示して阿和薩迦  
紀年 南都水屋川の南、水屋の社あり所ハ二層臺  
盡鳥言稲田野多しと云、此祭ハ伏見院の所守、疫病流



























見ゆ... 遠慮... 我... 柳... 楚... 抄... 連... 袖... 天... 雲... 曇...

天ニ雲ニ曇ニ曇... 句数并去無... 附言世本流布の版式...

表八句と蕉ふ物

神歌戀無常 述懐々旧名所

同字病体人名... 西行の軍法... 春の秋... 夏冬... 四季...

四季... 夏冬... 四季...

長花初... 鳩の浮巢... 大和本草... 水食似鳥...

鳩の浮巢... 水食似鳥... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...











戴。豆。廻。山雀。日雀。四

十雀。此雀は秋のこゝに耳をたたく

と用。野鳥。此雀は秋のこゝに耳をたたく

裕。野。此の字を野と書くも秋のこゝに

掛。此の字を野と書くも秋のこゝに

野遊。此の字を野と書くも秋のこゝに

節供。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

四月吉日をえりて馬を給をとりて人

川院寛治七年五穀成就天下泰年の

の馬料を厚くし色別年長を行ひぬ

あり。此の字を野と書くも秋のこゝに

臨時の旅行の後世五月五日式日と

く。此の字を野と書くも秋のこゝに

各南一の鳥居の外に於て馬を給を

をけり。此の字を野と書くも秋のこゝに

以て馬を走らせしを踏柳と云ふ

元帷子と云ふ。此の字を野と書くも

夕八朔より白帷子と云ふ。近代士

水。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

節。此の字を野と書くも秋のこゝに

一葉一花をすく。此の字を野と書くも

酒。此の字を野と書くも秋のこゝに

酒。此の字を野と書くも秋のこゝに

酒。此の字を野と書くも秋のこゝに

酒。此の字を野と書くも秋のこゝに

酒。此の字を野と書くも秋のこゝに

酒。此の字を野と書くも秋のこゝに

酒。此の字を野と書くも秋のこゝに

酒。此の字を野と書くも秋のこゝに

酒。此の字を野と書くも秋のこゝに

酒。此の字を野と書くも秋のこゝに

酒。此の字を野と書くも秋のこゝに

酒。此の字を野と書くも秋のこゝに

酒。此の字を野と書くも秋のこゝに

酒。此の字を野と書くも秋のこゝに

酒。此の字を野と書くも秋のこゝに







とぞ打越を種ふはり 古今の通式ニ

指合可有分別事

あそ 傾 小

て 古式ニ大車一と

子細通 老親子 此二品ハ古式ニ

今式ニハ各別 鳴子 網 花鳥

の繪 花 桜 楓 紅葉

古式ニハ鳴子の編をきくねと植物ニ二品を  
とやいのあそをのわらびうはりのあそを  
とては鳴子ニ白きべー網ニ白きを二品  
去の例あり或ハ身身數の法ニそそ  
くを持ちあそはけ敷物ニを編をきく  
やまへく籠くあそはけ敷物ニを編をきく  
二品の去るあそはけ敷物ニを編をきく  
の例あり

あねめの事あり根の赤きとて赤兼古車五日五目あり  
又の根合と云ふはり 古式を今の儀のくし左の根一丈五尺

南天花

右の根一丈二尺のすし古今著聞集ニあり

是之後冷泉院の時時之都若門院の根合也

和名ニ大車也 画譜ニ關天竹と云ふは此也

陽の地ニ大木あり作ぬ土島の山ニ長き二丈余用一尺二三寸

文火と 瞿麥 常製 和名抄 和名 赤天之古 止古

苗のまゝ一尺をとりて葉尖を小さく青く根ハ赤色也 形細

蔓青の如し 花紅紫赤を五月に至り実熟す

大和撫子 唐撫子 川原撫子 鶯撫子 木の種有 葉雅抄

唐撫子ハ木の根あり大和撫子ハ紅紫赤を五月に至り実熟す

石竹 和名抄 瞿麥 昂る石竹ニ今以て二種あり

夏の菊 本草菊ニ夏

生胡桃 物

張騫西域ニ使してかへり胡麻の種を得たり 本草

ナスビ 茄子 和名切韻 茄一名紫茄子 杜宝拾遺 鑑 階場

蘭湯 浴 大蔵礼五

日當浦 京師屋橋ニ昔とてこの日當浦を取て六月

室明神祭 播州室の津ニ大

去嫌 五月ならむ

九十一

花鳥有ニ物之事

柳 桜 鳶 燕 鶯 千鳥

菊 此七品ハ古式より一座一物の物あり

鬼 虎 龍 女 此四品ハ連雁乃

千 句 有 一 物 之 事

鬼 虎 龍 女 此四品ハ連雁乃

花鳥有ニ物之事

柳 桜 鳶 燕 鶯 千鳥



冬牡丹・冬椿・冬梅・紅

梅・桃・梅枝の紅葉

山吹・郭公此八品ハ花鳥の中ニ

日用可輕物之事此十品ハ日用ニ多ク

昔・曉・庭・垣・袖・衿・湯

汁・文・使此十品ハ古式ニシテ

照・曇・泣・笑・植・蒔

眠・覚・起・居此十品ハ日用ニ多ク

目・鼻・耳・口・手

尤可不審旋之事此六品ハ支体の躰ニ多ク

老・福神・親子此十品ハ古式ニシテ

龍・民の龜古式ニシテ

稻妻・雷光・鳥鵲の橋

龍・民の龜古式ニシテ

龍・民の龜古式ニシテ

龍・民の龜古式ニシテ

龍・民の龜古式ニシテ

龍・民の龜古式ニシテ

龍・民の龜古式ニシテ

龍・民の龜古式ニシテ

龍・民の龜古式ニシテ

龍・民の龜古式ニシテ

龍・民の龜古式ニシテ

龍・民の龜古式ニシテ

加茂・向一・初祭五月十三日

女十二人・若狭・若狭

山崎園・宇治郡宇治の里

應神天皇・菟道稚郎子

關白頼通・公子等院建立

鶉の巢先板

鶯音を入月令反舌

鶯の附子ツケ

羅細布

洋の花呉晋本草

瓜の花花菱

梅漬梅干

蠶糸

薬玉五月の玉

薬日五月五日

薬持五月五日

薬草五月五日

薬草五月五日

薬草五月五日

薬草五月五日

薬草五月五日

薬草五月五日

薬草五月五日

薬草五月五日

薬草五月五日

薬草五月五日



青楓 櫻鳥 泪の露 泪の雨

曾不及論物之事 雲霞 椿 花 蓮 実

萱草花

忌草、時珍曰萱草護之作護心志あり 詩之憂思不能自遣故欲樹此草

栗の花 蘇頌圖經 栗の本より二 二大葉極めて穂を類せ

山梔子花 時珍曰危 條長して胡蘂の花似たり

菜の實 和漢三才圖會 菜の葉を煮入地多くと菜の根あり

水鶏 同上 龍鳥名 久比奈抄

黒鴨 仙覺万葉抄 黒鴨一名あまの鴨のたぐひあり

黒くく 白くく 梅雨中の空合をくくして

や山 是ハ伊勢山田大神宮の御田植

田御田扇 今式 大神宮の宝新々々 神事儀

指合 五月 くらやま 九十三

指合

(貞享式) 一合とつゝとて 小まけの同字あり

わいづく 二ツ〇おをかくる

いつしう 一ウのもの二倍ハ二ウ

四季 昔 夜 寺 巳 行 実 直



いづせん 一ツの上の五文字を並べ  
く字にいづせん

いづにいづ 二ツの内に一ツの  
内をいづにいづ

いはな 上句下句の字を  
もつていづにいづ

むとば 濁音二ツを  
いづにいづ

にふとふり 上句のふを  
三ツのふにふり

ふとふり だふとふり  
むとふり

ふてふり だふとふり  
むとふり

ぬぬとぬ ぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬ

ぬるとぬる 二ツのふを  
ぬるとぬる

ぬんとぬらん 七ツのふを  
ぬんとぬらん

るる 二ツのふを  
るるるるるる

るるとるり 青蓮云廻鏡  
るるとるり

又打敷と縁とぬ創り同巻  
存終尾の持と酒あきへる

け川 岸くま下地敷てみる

求く相向ふ所の柱より  
障りあきさるる

以下句と日とをえ  
子孫子孫をえ

とくふ所の東の華豊宮  
神子孫子孫をえ

も大神宮一の居る  
も大神宮一の居る

宮ハ六本骨二編を  
宮ハ六本骨二編を

楊梅 時珍曰楊梅  
楊梅

蛇状子 本草啓蒙  
蛇状子

魚築打 石  
魚築打

ま松本祭 朔日  
ま松本祭

菽植 廣韻大豆  
菽植

菰苳 蘇頌水中  
菰苳

け削懸の甲 養蠶  
け削懸の甲

鏡渡 長車  
鏡渡

水馬 義楚傳  
水馬







お 物まわりのひそのもとへ又つまきせ  
しの子のあとも皆二句まに

ら ーしーとらしーら

んとらん 二句まに

あん等 二句まに

う ち 二句まに

や 二句まに

ま ま 二句まに

け け 二句まに

け け 二句まに

け け 二句まに

け け 二句まに

け け 二句まに

け け 二句まに

け け 二句まに

け け 二句まに

て て 二句まに

て て 二句まに

て て 二句まに

て て 二句まに

て て 二句まに

て て 二句まに

て て 二句まに

て て 二句まに

て て 二句まに

て て 二句まに

て て 二句まに

て て 二句まに

て て 二句まに

実を結ぶを獲るといふゆゑを藤  
とひ大なる代傷といふあり

綱目地衣草大明日華本草曰此乃陰濕の地日曬すと  
て若る苦蕪二〇石炭時珍曰其状花菱の如し〇玉拍

弘陶別録石上生ま枝の如し五寸花葉あり  
〇菜花 日花本草 葉の根の上生まる白鮮也地衣花

の如し〇本邦にも亦屋上庭園石上樹上多く苦を  
星以五月淋雨るといふとて苦を星花し花の状の如し

そのを生ませる名 胡麻時 三毛ありといふ  
芝を星の花といふ

至す生生のまひ時を下しとる月花  
異く七月実熟する早晩の二種あり

和漢三才圖會 花辨蛾の如し形外白く肉は紫  
中へんを毛を實濁るを毛を月星を収めぬる

て 天南星 藤原道隆 天南星の如く平次  
よる三月苗を星を荷梗

似てそ葉を二入るといふ葉葉の如く両岐相  
抱く五月花をく蛇頭を似たり若る毛七月実を結

ひ徳をある石榴の子を似たり紅毛〇時珍曰  
一名虎掌葉の形をく似たり因てある南星

とて根白く白く形老人星の如く  
ある故に南星と名づく云々和名虎掌

和漢三才圖會 鉄線花の如く苗は根より生じ一  
二三葉微若葉の秋に似て小く茎細く軟甚動し

故に鉄線といふ俗名蔓をくそ葉葉を依り  
四月花をくく蔓の下に葉ありて茎を抱く亦一異

ありそ葉を白く毛の辨平に異る葉図く葉色若  
葉美そ葉波まの天羅をを渡りの徳をあると似

そとてく子あり〇千葉鉄線の外六の辨して白く  
常の如し内の辨もす〇白く子葉短く細く似

てくくく青く葉あり外の  
辨既とほまが内の葉をく

あ 菖蒲を

和漢三才圖會 仁徳天皇三十九年  
五月始て詔

十九年五月天皇南苑を御して騎射走馬を親たす  
是日太上天皇詔して曰昔ハ五日の節常々菖蒲を用ひ

て渡りまのこくは菖蒲やぬ今うして  
後菖蒲うけざる者ハ宮中に入らざらん

の 興 公事根拠 六府あや名の興を南苑の階の東  
西くつ四日ハ朝餉の庭をまをく川主殿

指合 五月てあ 九十六

四月 五 九十六

四月 五 九十六

四月 五 九十六

四月 五 九十六

四月 五 九十六

四月 五 九十六















心へさやあしぬふりつゝあて

とる債事申中の志のひびく、床の下影の  
率也川のいささか顔しそち心あつた  
まうまの前の作者のうらなて志の心  
あけまうも後の眼力まては志の心  
をえ給これハ彼と我との二心まう  
志ま決して二心まの心へ

○昔堂云兼門は志の初まう空つちる  
まはらまきハ心のあつた心まのま  
まうまをまうまのまのまのまのま  
作者のけりまのまのまのまのま  
の初まのまのまのまのまのま

○評云晋子ううの「物ま」に狂ふ男  
のまかまのまのまのまのまのま  
合く臨むたの志のまのまのまのま  
て志の初まをまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのま

○志の詞ハ志の志のまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのまのま

恨むと戀、待戀、待と戀、思ふ

戀、思ふと戀、絶と恋、絶て久し

ま戀、憂戀、契と戀、何と戀

恋の奴、恋衣、恋草、恋の病

思 物思ひ、ま恋思ひ、思川

思ひ思ひ、思ひの山、思ひの地

片思ひ、相思ひ、思ひの情、うら

まうま、思ひの胸、思ひ草、思

ひ鹿、思ひの

情 思ひ情、思ひ情、思ひ情

思ひ思ひ、思ひの情、思ひの情

思ひ思ひ、思ひの情、思ひの情

思ひ思ひ、思ひの情、思ひの情

思ひ思ひ、思ひの情、思ひの情

思ひ思ひ、思ひの情、思ひの情

思ひ思ひ、思ひの情、思ひの情

一説、隣國品類三百余種あり四月初より花をさく五月盛  
あつたまのまのまのまのまのまのま

凡三四里なり又遠く山山のものも乾川の両辺又  
三四里なり隣國社村に甚多し五月満山花のま

早松草 和漢三才圖會 松草ハ九月の交を盛と  
まのまのまのまのまのまのま

子松草とも名く 蟹子 同上 倭名抄云蟹子  
女味香未可なり 和名佐之酒醋の上の

少虫ニ極まるに蟹醋腐肉の中ニ初め蛆を生じ蛆化し  
く心腹にまうまのまのまのまのまのま

五月間 李沈愁霖歌云葉破苔異未林滴  
賦光透長庭沙色恨無長劍一千

儀割断頭雲着暗碧 讀玉まのまのまのまのま  
へぬまのまのまのまのまのまのま

騎射 年中行事云五月廿七日 騎射を所覽し  
まのまのまのまのまのまのまのま

胡瓜 時珍曰胡瓜張書西域使して種を得故胡瓜  
まのまのまのまのまのまのまのま

瓜を 玉簪 和漢三才圖會 此者葉曰潤くして  
まのまのまのまのまのまのまのま

名つくと五月の花をさく 本草 時珍曰玉簪一名白仙鶴共  
まのまのまのまのまのまのまのま

をまのまのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのまのま

根衆辨を以て合或は或ハ百合病を治ま故ま名つくと  
まのまのまのまのまのまのまのま

●姫百合、時珍曰山丹、まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのまのま

似て辨少なり ●鬼百合、時珍曰卷丹、その莖葉山丹  
まのまのまのまのまのまのまのま

子生れ結く、枝葉の間まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのまのま

三才圖會 花正白葩厚く大なり上に向ふ或は様まのま  
まのまのまのまのまのまのまのま

戀之詞 五月 まのまのまのまのまのまのま

戀之詞 五月 まのまのまのまのまのまのま

戀之詞 五月 まのまのまのまのまのまのま

戀之詞 五月 まのまのまのまのまのまのま



御類 御訓 御書 御言 御書 御言

涙の海。涙の雨。袖の泪。袖の露。

袖の海。涙の雨。袖の泪。袖の露。

恨 うれしの山。恨の海。

夢 白体よりして 夢の道途

夢の道途 (雅語釈解) 夢のす

婿入。婚入。婚入。婚入。

新枕 待女郎。貝桶。新枕

若後家。若衆 寺若衆。町

若衆。男色 美少年。小々姓。

念者 男ををのふ(一)の谷城軍記

念者 六孫大庭補の位。宝暦元年印行

別の袖 逢ふ

密言。兼言。私言

玉章。艶書。みうらえん

手話。袖引。尻はゆる

門さたり。けさたり

契 ちまりの末。ちまりの末

二世の契。うたをうた。仔細

四季 非 皆 我 手 記 所 在

愛まべししと山溪間より出とをを得く

車百合 同上

鹿子百合 花律 白花紫

遠百合 如藤三丈金 黄紅

水鳥の巢 浮巢 宇量 鳥穴

菖蒲刀 黒川道祐曰 端をよる処の木刀或は

神水 全門記 重五乃 日午の時雨ある

新宮祭 五日 三井寺の山 中々終く是

下毛の花 同上 薺線

越瓜 時珍曰 越瓜地を以て多し

蕺菜花 三月種を下し苗をほし地を耕く

新宮祭 五日 三井寺の山 中々終く是

下毛の花 同上 薺線

越瓜 時珍曰 越瓜地を以て多し

蕺菜花 三月種を下し苗をほし地を耕く

新宮祭 五日 三井寺の山 中々終く是

下毛の花 同上 薺線

越瓜 時珍曰 越瓜地を以て多し

蕺菜花 三月種を下し苗をほし地を耕く

意之詞 五月 一ひき 百一



身たしあゝ。 独あ。

人目。人目の関。人目を思ふ

目之むせ。神祈。憂別。

うき人。色。老好。色こ

まふ。ちろろ。名こ

たる。うき名。もろ名。おむ

名。あま名。あま名。思ふ名。

い。い。い。い。い。い。い。い。

待。待。待。待。待。待。待。待。

待。待。待。待。待。待。待。待。

鏡。十寸鏡。姿見鏡。よ。よ。よ。

は。は。は。は。は。は。は。は。

形見。出家落。 隨落を云

坊主おとし。 寺比丘尼。

(曾董集)東海記。百治印水巻之

二云。い。い。い。い。い。い。い。い。

中。声。い。い。い。い。い。い。い。い。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

花四葉。白し葉の具。あま。あま。あま。あま。

ひ。未史。あま。あま。あま。あま。

菱の花。時珍曰。菱一名菱。葉支。菱。菱。菱。菱。

批。批。批。批。批。批。批。批。

稔。稔。稔。稔。稔。稔。稔。稔。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。葉。























切字

(貞享式) 切字のハ十八字の品ありて... 切字のハ十八字の品ありて... 切字のハ十八字の品ありて...

是速復佐雄能神... 子孫ありとついで...

所傷殿祀... 夜に...

左の足より入右の足より出...

和泉式部... 和泉式部...

少舎人山科家... 菅貫と菅貫...

神事次第... 菅貫と菅貫...

竹奴青奴... 和漢三才會...

山谷詩趙子... 趙子...

夫人之職... 青奴...

二國... 長き五丈短き...

夜臥寢の時... 抱き...

の林檎... 和漢三才會...

を大後... 和漢三才會...

その心詞... 切字のハ十八字の品ありて...

中の切

猫の意... 切字のハ十八字の品ありて...

んの切

切字のハ十八字の品ありて...

換抄切

世を... 切字のハ十八字の品ありて...

四季... 切字のハ十八字の品ありて...

非... 切字のハ十八字の品ありて...

是速復佐雄能神... 子孫ありとついで... 所傷殿祀... 夜に... 左の足より入右の足より出... 和泉式部... 和泉式部... 少舎人山科家... 菅貫と菅貫... 神事次第... 菅貫と菅貫... 竹奴青奴... 和漢三才會... 山谷詩趙子... 趙子... 夫人之職... 青奴... 二國... 長き五丈短き... 夜臥寢の時... 抱き... の林檎... 和漢三才會... を大後... 和漢三才會...

味は... 微酸く... 根源... 大... 百官... 大山祭... 石尊... 温風... 小暑温風... 慈姑... 冲繪... 六月をわが... 百八











未の春の

ふの由

畢ぬ

つ

下知の詞

か

ゆ

よ

ぞ

ぞ

ぞ

ふ何そ

こころ

四季

干瓢 乾瓢、古用の中をきをとる。枝の切りつぎはる瓢をまろ白肉を以て皮を剥き、一兩を過す時にも皮を剥いて佳なりす。

眼皮 同上。眼皮と剪羅と二敷異。鮮之春首を以て葉を剥き、一兩を過す時にも皮を剥いて佳なりす。

楮花 紙漉草。和漢三才圖會、楮皮今多く紙漉す。布を漉す時、楮皮を漉す。和漢三才圖會、楮皮今多く紙漉す。

潘の 和漢三才圖會、香露の花の好。潘の似たり故。潘の似たり故。潘の似たり故。

韓瓜 甜瓜。瓜の似たり。瓜の似たり。瓜の似たり。

節折 節を折る。節を折る。節を折る。

吉野の蛙 九日、富山の蓮花會。吉野の蛙。九日、富山の蓮花會。

脱 本草集解、時珍曰、土中芭華各時を以て、出旬目。脱。本草集解、時珍曰、土中芭華各時を以て、出旬目。

田草取 本草集解、時珍曰、土中芭華各時を以て、出旬目。田草取。本草集解、時珍曰、土中芭華各時を以て、出旬目。

箏 説文、箏ハ竹席ニ竹を以て、箏。箏。説文、箏ハ竹席ニ竹を以て、箏。

四季

切字 六月 百十一



又二割 祀極中へ遊とに嘆とて...

なん (あゆみ抄) 世にぬひのなんとらひつ...

ん (同上) 今も後とてよりうら...

らん (同上) せん心つてもとらた...

ら (同上) らんらんハ悦とて...

けの字そひらるて書上...

は (同上) 世の中いたえとて...

ま (同上) 思ふ物笑ハサ...

め (あゆみ抄) 子大むひを...

な (あゆみ抄) ち解除夏を...

雲雀 元ら鳥を...

露涼シ 露涼シ...

約経草 ツリカサ...

ね練 ツリ...

な名越後 神祇令...

相國寺懺法

紀事 六月十七日 俗の相国寺...

津島祭 六月十二日...

神島 鎮座の後神民の夏日...

笛声 別調を神歌...

露涼シ 露涼シ...

約経草 ツリカサ...

ね練 ツリ...

な名越後 神祇令...

雲雀 元ら鳥を...

露涼シ 露涼シ...

約経草 ツリカサ...

ね練 ツリ...

な名越後 神祇令...

雲雀 元ら鳥を...



川を渡るに似て渡るは  
つらつら川中やたそぬし

な (あめい抄)

ナアと人といふるを  
二日よぬるにせしむる春

を

いそつぎを暮のうき袴  
此影のを切らあり

べー (同上)

まつちををまるはうくちりてま  
かどありとちりてま

あり

つらあまする切字あれはほと不  
かほ (同上)

やハ

いそつぎを暮のうき袴  
此影のを切らあり

いそつぎを暮のうき袴  
此影のを切らあり

四季

伊言片語 時言新牙草

夏後 夕後 友は  
荒和後 夕後 友は

夏神樂 川社 貞後抄 川社  
修多羅 夏神樂 川社

復瘦 万葉 石上 吾物 申寸 夏瘦 尔言 跡云 物  
曾武 奈伎 取食 統 採 兼 夏瘦 尔言 跡云 物

夏引の系

神馬漆

菜瓜

奈良漬製ス

神馬漆 下学集 神功皇  
菜瓜 和漢三  
奈良漬製ス 同上 糟漬の  
法 古月 土用

白之格

六月

なむ

百十三



不動言の切

まじき切字もくもくわの下、動ぬ  
羽をたぐひて大く心まじきあ  
まじき切字もくもくわの下、動ぬ  
羽をたぐひて大く心まじきあ

神祇之格

尊もたつたまに女御延宮 昔 薫  
ねてくく花の由く神の殿

釈教之格

仏像も如來も合もる 妙法蓮華の音  
薩摩の日はまきもみ海の子我

戀之格

紅梅やその恋つくる 玉簾

冬常之格

やうやくぬくもくもくわの下、動ぬ  
羽をたぐひて大く心まじきあ

追善の格

秋風やおきておきて 桑の秋  
常帰より 哀の涙のまじき

述懐の格

ふゆや秋の緒もあく 床のあ  
父母のまきもみ海の子我

羈旅の格

せつな旅もくもくわの下、動ぬ  
羽をたぐひて大く心まじきあ

銭別の格

本座の子乃白魚送る 別う  
此の心持せよよまきもみ海の子我

名所の格

ありし自りくもくもくわの下、動ぬ  
羽をたぐひて大く心まじきあ

伊奥の格

四季

俳諧 歳時言新 身言

めは固く封ぎ大低 納豆造ル 同上 納豆造  
七十五日して成る 種あり大低

鹹波の法より出つて酒 夏切茶 記 六月  
着と居格家まきを重き

宇治の茶人討茶を討茶う 常々茶をまき  
けの良談の家で贈る 是を文切まきく 凡壺の蓋を

紙を糊して空くまき紙張り 風温をうてまきの内  
へ入しめまき茶用まきくあまき小刀を以てまき

の蓋合目の箱まきを蓋て茶をまきまきまき紙壺  
のまき切まきくまき口まきまきまきまきまきまき

山林清涼の地まきまき故まき中 用る処の茶は元ッ  
まきまきとまきく飲料 供まきを文切の茶まきまき

夏ぶし 雑談抄 髪沸 瘡とけ 長中 長中  
小児の頸瘡 江戸の俗詠りて文切

む 虫 子 虫 拂 虫 月 土 用 中 諸 佛 寺  
土 用 子 冥 空 の 虫 拂 を 今

和俗六月十五日 中 天 日 の 晴 る を 俟 て 衣 服 并 書 虫  
の 類 まきまき 曝 せ 是 を 涼 を まきまきまきまきまき

律 茂 る 新 撰 三 大 會 本 綱 之 律 故 墟 道  
の まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

子 を 結 ぶ 鏡 塵 栗 甲 壁 山 中  
小 城 の まきまき 関 之 律 茂 芭 蕉

水 子 ち ち 雀 の 雀 の  
ゆきまきまき 其 自

の 凌 霄 花 時 珍 曰 紫  
蔵 之 凌霄

大 一 七 林 の ぬく 雲 結 ぶ 枝 を まきまき 一 枝 数 葉 共 長 く  
一 一 七 嵩 ち り 海 まきまき 文 子 一 枝 まきまき 花 まきまき 状

葉 の ぬく 八月 豆 の  
葉 の まきまき 子 まきまき

之 鞍 馬 の 竹 切 親 長 卿  
記 文 明 三

年 六 月 廿 日 廿 日 勸 修 行 切 之 夜 入 入 入 渡 法 の 儀 あり 入 入 入  
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

ある 夏 五 日 渡 戸 を 修 せ 日 中 大 蛇 の 峯 あり 入 入 入 峯 延  
屋 門 の 咒 誦 誦 を 蛇 の つら 斬 断 せ 入 入 入 此 寺 の 本 願

人 爲 原 の 伊 勢 人 甚 難 之 奏 一 七 役 夫 五 十 人 を 裁 一 竹  
蛇 を 蘇 原 山 井 之 俗 地 地 を まきまき 大 虫 の 峯 まきまきまき

て あり 年 六 月 廿 日 廿 日 村 民 甚 難 之 奏 一 七 役 夫 五 十 人 を 裁 一 竹  
又 別 之 竹 二 束 を 堂 の 中 間 之 溝 横 横 横 横 横 横 横 横 横 横 横 横

夕之格

六月 月のく

百十四















人の面儀をかくる者時々又屋の表を床の方に向くかきかへし向をさす折なり

○書を左初より右終筆を収むるや入筆は下より上へし又筆の右より左へし毛先をかしきし可

○表八の字は東を右に折るをまき付て終るは二より打越をさす裏より一の折の端を折して左の字より右の字の向へてまきし打越をさすんが折るあるは二の折の端を折るの折るめく二より下も二の折も同じく下も多折の折ハナトヤス

○重合去極をさすは油所まきかへし威儀正しく座せしは筆茶畑の字も終る致もさすは欠の成りなり

○重合の文字知ぬ字の収るをさす可し指合を標し度くはまきをさすなり

○吟考りけあやうさるは二の折るハ別して高声の吟はし一折のまきの折筆の類は二折の折筆をさすなり

○重合は二より上より下へし三より上より下へし

○重合は二より上より下へし三より上より下へし

○重合は二より上より下へし三より上より下へし

○重合は二より上より下へし三より上より下へし

○重合は二より上より下へし三より上より下へし

○重合は二より上より下へし三より上より下へし

○重合は二より上より下へし三より上より下へし

○重合は二より上より下へし三より上より下へし

○重合は二より上より下へし三より上より下へし

○重合は二より上より下へし三より上より下へし

附合之事

諸風体口受 三ヶ之大事

○服三四白目まきの折るは二より上より下へし三より上より下へし

四季 附合 六月 百十八

申の時神託ありて曰難波の駒をまきし後世よりこれにまきし駒をまきし由をまきし依る菅原を此地之鎮

らまきし創設ありて申子も鹽物車樂ホ水陸もまきし後

訪うて神樂夷の所後所に出往還川舟もまきし數万の程ハ

形善も遊 尾張國年而前都江岸松 垢島千電の郷あり正殿

五座第一天照大神身二まきし盛島尊三日本武尊四宮

實難命 日本武 皇妃 五建箱種命 官實難命 右五座西より

まきし外孫社まきし二百余座あり當社ハ人皇十二代

景行天皇の御宇に終るは天智の御時故有て皇

都に福善十九年を終るは天武天皇末鳥元年再ハ

當國に遷座まきしは初創祭勅使下向有て官幣

を奉るは二折當社の神事年中數度あり正月十日

御方の神事同午留射の式十考同的二十日西宮の射

まきし二月巳午未の日祈年祭同初末の日鳥食の神事五月五

日ハ神樂籠皇極門上ハ神幸 古史 六月九日山神祭ハ

あり熱田ハ村ありまきしを行ハ同日夏越の鼓鈴の社ハ

の川にありて是は修也七月七日ハ女宮の大掃除十月

初寅卯辰日新嘗祭十二月廿九日兩宮外院燈籠掛あり

あ 熱田祭

尾張國年而前都江岸松 垢島千電の郷あり正殿

愛宕の子日詰

此所神社の供所ありて

神社啓蒙丹波國妻岡郡水雄の山ありて神二座

伊弉並尊少彦尊神二座 神祖指選 愛宕権現の瑞

内ハ朝遇榎命奥の山伊弉舍那美尊 記事 六月廿四

愛宕諸是子日の千度當りハ俗と名残子日詰

寺傍ハ坊まきしこの日奉持の人ハ飯食を食まきし

坊者まきし札を賣りて飯櫃の杖を求め糍をりけ

是を肩下りて飯櫃の杖の籠の上ハ神みりくのかきまきし

ちハ災を免るハ凡ハ坊國毎ハ種越ありまきし

麻の葉流

板草、麻の葉を切て糍とまきし

秋葉のまきし麻のまきし二麻の

暑日 暑き日とてハ

青嵐 文未左の楯の縁を吹り



七名八体とくくも一才ハ  
有心會釈道句起情

向附拍子色立  
其人于場時分時景

時宜天相觀相面影  
又ハ 句付寄志移

見八走  
又ハ 平四ツ平風情詞違

心相對埋付  
又ハ 凡々様々...

又ハ 凡々様々...

又ハ 凡々様々...

中一室一点の雲... 赤草 一莖一葉...

青田 四月苗を栽

藍丹 四月苗を栽

麻 同前

番椒 青瓜

阿古田瓜

酒 諸国名物記

凡々様々... 又ハ 凡々様々...

四季 俳諧 詞 新 五言

四季 俳諧 詞 新 五言

西園寺殿妙音講 四月十六日

附合 六月 妙音天を四糸の北室町の

附合 六月 妙音天を四糸の北室町の











くつら極之日を東三日を西三日と述べては  
多のゆき日の子を時時とるんは  
四の十甲のくつら月七日のくつら  
あつらふと所くつらめんまよふの  
さうまをみ物もあつらふまよふ  
あつらふとくつら頭のくつら  
行の字をみればくつら  
くつらくつらくつらくつら  
くつらくつらくつらくつら

是打添くつら時

牡丹をくつら打のくつら  
卯月廿日のくつら

くつら牡丹のくつら  
くつらくつらくつら  
くつらくつらくつら  
くつらくつらくつら  
くつらくつらくつら

川のくつら水清くして溢るは  
のくつら人水臨くくつら  
川合の社の前住吉の東の川  
廿九日くつら三十日くつら  
あつら林間くつら  
巻物の神たる罪をま  
置戸を以て遂に促徴  
罪を賤くくつら亦曰く  
●中級川、河合、川古、七瀬、  
敏川、東ノ瀧、松ノ寄、石影、西ノ滝、大堰川、  
茗荷笋 菰頭曰、菰荷、春初、  
下くつらくつらくつら  
櫛之、漢、蓮のくつら  
くつらくつらくつら

御稜

神代

水芙蓉

真享式

茗荷笋

菰頭曰、菰荷、春初、  
くつらくつらくつら

水葵

くつらくつらくつら  
くつらくつらくつら

道饗祭

公事根源、  
元亨秋書、推古天皇十四年秋七月、  
太子、  
くつらくつらくつら

勝曼祭

元亨秋書、推古天皇十四年秋七月、  
太子、  
くつらくつらくつら

神今食

神今食

志渡寺祭

清光院志渡寺、  
くつらくつらくつら

くつらくつらくつら  
くつらくつらくつら  
くつらくつらくつら  
くつらくつらくつら  
くつらくつらくつら











木のこもるけも後と移りぬ  
西日のくもふもまた文書ニ  
旅人の風をまゆく暮暮と

夏白の草のこもるけも後と移りぬ  
後日ともまをを夢散せし  
ほくく西日をもまゆく時分を空めて  
つれづれとこもるけ

夏白の草のこもるけも後と移りぬ  
後日ともまをを夢散せし  
ほくく西日をもまゆく時分を空めて  
つれづれとこもるけ  
夏白の草のこもるけも後と移りぬ  
後日ともまをを夢散せし  
ほくく西日をもまゆく時分を空めて  
つれづれとこもるけ

夏白の草のこもるけも後と移りぬ  
後日ともまをを夢散せし  
ほくく西日をもまゆく時分を空めて  
つれづれとこもるけ

夏會 **すくき玉** タマ  
國詠 養昭王招涼之珠當  
汝月兮自得玉

菅 **菅** スダ  
和漢三才圖會 菅本調之載を蓋  
三稜の形より根異なり香附

蠟 スロ  
時時白子狀蠟の如し身短く節促り  
足もく毛有り根根の葉土の中へける

水飯 スイハン  
洗飯 弄花云干飯あつて類水つけ或内袋  
まかきんとうくひめとも云飯を洗食云

六月之部類  
**春六月** 林鐘律 大暑中 季夏 氏期  
小暑 且月 懸月  
朔月、陽水、風待月、鳴神月、常夏月、水無月

六月 **芒種** マウシュウ  
夏至中 八坂祭、ヒシ 札幌祭、ヒシ 熱田祭、ヒシ 住吉祭、ヒシ  
丹生川祭、ヒシ 出雲祭、ヒシ 上野祭、ヒシ





